

令和6年 中標津町議会

防災に関する道外視察研修復命書



岩手県遠野市 東日本大震災から10年の節目に常設化された後方支援資料館にて

令和6年1月31日

中 標 津 町 議 会

議長 後 藤 一 男 様

総務文教常任委員会 委員長 江 口 智 子

厚生常任委員会 委員長 松 村 康 弘

産業建設常任委員会 委員長 宗 形 一 輝

議会運営委員会 委員長 高 橋 善 貞

副議長 鈴 木 克 弘

令和6年 防災に関する道外視察研修復命書

1 視察期間

令和6年1月14日（日）～16日（火）

（風雪による航空機欠航のため延泊し17日に帰着）

2 視察先

1月15日（月） 岩手県

<遠野市> 9:00～12:00

- ① 現地視察 稲荷下屋内運動場
- ② 現地視察 遠野運動公園
- ③ 視察研修 総合防災センター

<陸前高田市> 13:30～15:30

- ① 視察研修 陸前高田市防災センター
- ② 現地視察 重点道の駅高田松原、奇跡の一本松

視察総括

視察の背景

令和5年8月に開催した中標津町議会「第2回防災力アップ講座」で、講師を務めていただいた陸上自衛隊第5旅団幕僚長より、千島海溝地震などの大規模災害に対する計画の説明をいただきました。

自衛隊では中標津空港を拠点とする根室管内の支援を計画しており、その実態をより深く理解するために、東日本大震災の折りに沿岸部の後方支援として力を発揮した、岩手県遠野市を視察してはどうかとの提案がありました。

遠野市は、中標津町と地理的に類似する点が多いことに加え、東北は震災以前から官民挙げての防災及び災害救助を想定した訓練が実施されていたとのことで、所管する総務文教常任委員会のみならず議会全体の問題として視察すべきであると決定し、3常任委員会及び議会運営委員会の委員長と副議長とでの視察研修となりました。

遠野市の後方支援の原動力は「縁」と「絆」

夕刻の遠野市中心街、商店の閉店後は街路灯と駅前のイルミネーションが静かに灯り、その街並みからは、かっぱや座敷童を始めとする民話のさと呼ばれる所以を随所に感じました。

15日の視察当日は、今冬初という暴風雪警報が発令される悪天候のなか、はじめに支援物資の仕分け拠点となった稲荷下屋内運動場、次に自衛隊の活動拠点を置いた遠野運動公園の視察を経て、総合防災センターでの座学となりました。

2007年（平成19年）の岩手県総合防災訓練を始め、東北地方は大災害を想定した訓練が頻繁に実施されており、三陸沖沿岸部が被災した場合は内陸に位置し、救援部隊を受け入れる十分な敷地を有する遠野市を後方支援拠点とする認識が次第に県内で共有されていきます。

「隣町から沿岸部一帯にかけて、親類縁者の多い地域が被災したら、支援せずにはいけない」と、対応していただいた職員はみな口々に語っておられ、東日本大震災における遠野市の後方支援を一冊にまとめた「遠野市後方支援活動検証記録誌」にも「縁が結ぶ復興への絆」と記されています。

陸前高田市の消防本部にて

遠野市の後方支援を受けた自治体のひとつである陸前高田市では、地震により家屋が損壊したところに15メートルの津波を受け、更に流出したプロパンガスのボンベがあちこちで炎上するという大災害の中、懸命な救援・救助活動を繰り広げた消防の活動について、当時の3階建ての消防署の屋上まで津波に覆われ、鉄塔によじ登って一命をとりとめた生々しい動画を交え伺いました。

市内の99.5%の家屋が地震津波による被害を受け、市民を守るはずの警察や消防車両までが、がれきの一部となっているさまに言葉を失いました。

対応していただいた市議会議長からは、元日に発生した能登半島地震に自らの震災の記憶を重ね、胸を痛めている旨のお話があり、12年の歳月を経たとは言え、被災者にとっては寸分も風化していないことが感じられました。

震災の教訓を踏まえ、防波堤や道路、公共施設の整備が進む一方で、震災当時50名以上の消防団員が亡くなり、その後の団員のなり手確保が課題であることなど、中標津町における課題とも重なるお話を伺い、今後の防災対策に活かすべき多くの学びがありました。



遠野市後方支援活動検証記録誌



陸前高田市の復興の象徴「奇跡の一本松」